

## 3.11への応答、への応答

小林昌廣



Masahiro Kobayashi  
2012年3月24日

「3.11への応答」  
「a.Labo キックオフ打ち合わせ」  
イベント（第2回目）

(1) 開催日時：  
1回目 平成24年3月23（金）  
2回目：平成24年3月29（木）

(2) 場所：  
ソフトピアジャパン  
ドリーム・コア2階  
（岐阜県大垣市今宿6-52-16）

(3) 各回の担当メンバー：  
前林明次先生（1回目）  
小林昌廣先生（2回目）

(4) 定員：  
各回 10名程度（申込不要）

(5) 参加費：無料

(6) 問合せ：[RCIC]  
IAMAS 産業文化研究センター  
tel. 0584-75-6606  
fax.0584-75-6637  
<http://www.iamas.ac.jp/>

(7) 主催：  
IAMAS 情報科学芸術大学院大学

今回は三人の作家たちによる「3.11への応答」と題するプレゼンテーションが行なわれた。三人の作家たちにとって、3.11はなんらかの作品をつくるうえでの「契機」になったかもしれないが、3.11が作家たちの創造性やいわゆる作家的姿勢といったものに決定的な影響を与えたかどうかまではわからないままだった。

そもそも、ぼくは批評家としても生活者としても3.11から距離を置いてきた。ここで云う3.11とは、昨年3月11日に発生した東日本大震災とそれに続いて起こった原発事故、さらにはそこから派生して日本を席卷した放射能と原発の諸問題の総称である。そこには当然、国政の遅れやガレキ処理の問題など広く考えるべき事柄はあるが、それらは含まれていない。だが、むしろ、ぼくにとっての3.11とは、あらゆる人間が上記のような3.11という出来事に対していかなる態度や思想で臨んだのか、あるいは臨んでいるのかといった「後の行動」のことをこそ、3.11と名づけたいのだ。それは端的に云えば、「全員が3.11の当事者になること」を想定した、3.11的なイメージの集積とでも呼べるものかもしれない。そして、おそらくぼくはその3.11に対してきわめて慎重な態度をとり続けている。今回のa.Laboのために、3.11関連の書籍を十数冊読んでみた。科学技術、芸術、哲学、医療などさまざまな側面から3.11が語られていた。云うまでもなく、3.11という大惨事が発生しなければ、それらの書物は一切この世に生まれることはなかったはずだ。そのことは、たとえば太平洋戦争が起こらなければ、少なくとも宗教や哲学、さらには文学といったジャンルの多くの部分はおよそいまぼくたちが目にするものとは全く異なったものが出てきているだろう、といった無責任な見解と同様のものであろうか。災害と人、あるいは災害と人心は、歴史という不特定多数の人間の営みの連続においていかなる関係性をもたらすのかというより巨大な関心へと、思いは広がらざるを得ない。たとえば、吉田満の『戦艦大和ノ最期』や島尾敏雄の『魚雷艇学生』などは、戦記文学としてわが国の文学史に永遠に記録されるべきものだろう。それは3.11よりも太平洋戦争のほうが被害が甚大であったとか、国家を超えたレベルでの「人災」であったとか、そうした文脈で語らえる手合いのものなのだろうか。ぼくたちは、結核文学とからい文学と呼ばれるジャンルの作品があることを知っているが、震災文学とか3.11文学と名づけられるもの、さらには原発文学（一般的な原子力発電所をモデルにした文学作品ではなく、今回の災害によって露見した原発の問題を扱った文学）が登場した形跡はない。それは未だ時期尚早ということなのか、そもそも文学が扱い切れない巨大な問題として3.11が立ちはだかっている

のか、それもまだわからない。

つまりは、ぼくは3.11をいかなる文体で書き、いかなる口調で語り、あるいはいかなる知的武装によって思考していいのか、その方途を見出せないでいるのだ。そんなときには落語を聴こう。落語は単なるお笑いではない。亡き立川談志が云ったように、そこには「人間の業の肯定」という強くしなやかで、だが悲しくもろいテーマが流れている。昨年3月11日の震災以来、一度も紹介していなかった演目があることを思い出した。それは、ずばり『天災』というタイトルの噺だ。いらち（短気）な男がいる。女房だけでなく自分の母親にも手をあげる乱暴者だ。見かねた隠居は、男を心学の先生のもとに行かせる。心学の先生は、いくつかの事例をあげて、目の前にあるもののせいにするのではなく、なにごと天の災い、天災であると考えれば腹も立たないだろうと論ず。長屋に帰った男は、友人の家でもめごとが起こっていることを知り、すぐに仲裁に向かう。前の女房がやってきて修羅場になった友人に対して、男は心学の先生の口調を真似てチンプンカンプンな教を講じる。理解できない友人に対して、天災だと思えば腹も立たない、と結論づけると、友人はこう云う。「天災？ わしはいま先妻でもめとんをや」

テンサイとセンサイというダジャレじみたオチになっているが、この演目をなぜ3.11以降扱わなかったかと云えば、まずそのタイトルがあまりに社会的すぎるといえることがある。それにそのタイトルに牽引されて噺を聴いても、実際の天災はほとんど登場しないこともあって、今度は反社会的すぎること気づかされる。そんなバランスの悪さ、座りの悪さのようなものがこの噺にはある。だが、今回改めてこの演目を聴いて

（観て）みると、二つの発見があった。一つは、云うまでもなく、庶民にとっては心学の先生のありがたい教え（天災）よりも、現実の問題（先妻）のほうがよりシリアスでありシビアであるということ。そしてもう一つは、心学というジャンルそのものが享保年間に台頭してきた商人のあいだに広まった思想であり、落語の高座よりは百年ほど遅れるが多くの庶民の前で講じられてきた考え方であったということ。前者は、今回ぼくを含めた多くの人びとのうち、3.11に対していかなる応答をしていかかわからなかった連中の共通見解となりうるものである。そして、天災<先妻という発想は、言い換えれば学問<生活と理解され、さらには専門<素人と読み替えることもできる考えだったのでないだろうか。上に書いたように、心学（とくに石田梅石によって開かれた石門心学）は商人や町人に普及した思想ではあったが、『天災』の主人公たちにとってはそれさえも学ぶことの困難な「お上の思想」だったと思われる。落語『天災』は、人間のどうしようもない業をあっさり肯定しており、かつ今回の3.11によって明らかになったように、原子力科学の専門家の見解よりも、日々の放射能の問題、さらには生活の問題のほうがより優先されるということを示唆しているのだ。

前回は、今年三月の新橋演舞場における歌舞伎公演で、昼に『荒川の佐

吉』が、夜に『佐倉義民傳』が上演されていることについて触れ、前者は江戸の喧噪が厭になった侠客が奥州へと旅立つ話であり、後者は貧困と圧政に苦しむ農民を代表して命を賭して將軍に直訴に向かう木内宗吾の行動を描いた作品であり、解釈を述べることは割けるが、どちらも今回の3.11を予言的に扱っているし、その言い方に問題があるならば、歌舞伎劇の側からの「応答」と云うこともできるだろう、というコメントをした。つまり、その意味では、いま現在ぼくたちがこの日本で生きている以上、いかなる生活、いかなる表現、いかなる信条においても

「3.11的なもの」は不断に混在し、そうでないものと見分けることが困難になりつつあるのではないだろうか。

そこで、「3.11への応答、への応答」である。まずはその「応答困難」な状況を述べたい。9つほどの「現状」があげられる。

- 1 不幸の平等性
- 2 精神分析的防衛反応
- 3 当事者との乖離
- 4 情報過剰による情報不足
- 5 未来という視点の欠如
- 6 達成感の欠落と虚しさの反復
- 7 思想系人間の脆弱さ
- 8 言語（批評）よりも援助を
- 9 考えるべき優先順位

1は9にも接続される現状であるが、そもそも3.11だけを特化して論じることに対する疑問である。それが今日の最大の国家的人類学的大問題であることを承知していても、かつての人びとは数千万を失ったスペイン風邪や230万人を亡くした太平洋戦争よりも重大であると説明できるのかという疑問である。もちろん、スペイン風邪や太平洋戦争はすでに歴史の一項目でしかないだろうが、それはその時代を生きた人びとにとっては切迫する問題であっただろう。自身の生に対するあらゆる考え方を変更しなければならない契機となったであろう。では3.11はどうか。記号化されイメージ化された「3.11的なもの」に対して、人は何かをなすか何かを語ることが半ばタスクとなっているかのようなムードがあるとするれば、それは問題である。何かを為し、何かを語るとは必要だ。理由はない、必要だからだ。だが、それが全体的なムードとなってしまった場合には、はっきり云って「飽き」が来る。ボランティアの方も疲弊してゆくだろうし、援助にも限りがある。そして何よりも現地の被災されている人たちが前向きに生きていこうと思われているときに、3.11をふりかえるような行動や言説がどれほど彼らにメリットをもたらすのか、まったくわからないのだ。それは3の「当事者との乖離」の問題でもあり、当事者になりえないぼくたちはどのように3.11を取り扱っ

たらしいのかということについては後述する。また、飽きや疲弊や限界といったものはすべて5で指摘した「未来という視点の欠如」に前提されているし、6の「達成感の欠落と虚しさの反復」をもたらすことになるかもしれない。こう書いているぼく自身もまた7や8にあげた状況のあいだを揺れている。また、これは一般論であるが、こうした大災害が起こったときに、人は突如として保守的になる傾向がある。もう少しマシな表現を使えば「正常化の偏見」あるいは「日常化バイアス」と災害心理学で云われるところの心理状態を誰でももってしまうということだ。これは緊急時や災害時でも、日常的なノルマやタスクやスキームを続行することで「何事もなかったかのように」振る舞ってしまい、事態を楽観視して、個々の日常の文脈に据えてしまうような心理作用を示している。さらに「認知的不協和」という考えがあつて、これは複数の文脈のあいだに矛盾が生じた場合に、新たな文脈を創造・引用することで、文脈間の不協和度を軽減させようとする心理作用をさす。「壊れた原発は放射能を発生する」と「原子力発電によって電気の供給された生活をしている」とは矛盾した文脈だが、「ここは爆発した原発から遠いところにあるから安全だ」という文脈を挿入することで、全体のバランスを保とうとするじつに防衛的かつ詭弁的反応である。

要するに、ぼくと3.11ないし「3.11的なもの」とのあいだには、こうした事柄によって容易にコミットメントできない現状があつたということになる。

ただ、これだけは云えるだろう。従来は「科学技術」≧「芸術表現」と信じて疑われることのなかった不等号関係が、今回の3.11によって大きく揺らいたという事実だ。科学技術が少数の専門家集団によって開発・運用され、同時にそれに対する監督責任も有していると期待されていたわけだが、どうもそうではないということが明らかになったからだ。だからといって「芸術表現」の担い手の地位が向上したわけではなく、本来、人の営みというものは、本質的に「専門／非専門」といった隔てはなく、社会に対して人類に対してアプローチできる「潜在力」をつねにもっていることが確認されたばかりなのだ。だからこそ、芸術表現もまた科学技術とはちがったカタチで3.11に「応答」することも可能だろう。そこで問題になってくるのは「当事者性」という難題だ。「体験してない者は黙っている」的な言いぶりがなされることは、当事者からすればむしろ当然であり、ぼくたちは永遠の「外部」でしかない。もちろん1995年の阪神・淡路大震災では被災して酷い目にも遭ったので、そのときの経験や記憶や考えが今回の3.11に対して何らかの「役に立つ」情報を供給することはできるかもしれないが、それでも「他の人よりも多くの情報をもった他者」でしかない。テリー・イーグルトンが分類する二つの悲劇的事象においては、地震と津波とは徹底して当事者性の強い圧倒的な悲劇であり、原発の問題はむしろ全国民が潜在的にその被害を蒙る危険性を孕んでいた、いわば慢性疾患のような悲劇であるというこ

とになるだろう。3.11が記号化され、地震や津波よりも原発のほうがより「テーマ化」されてしまうのは、悲劇の質が異なり、そして当事者性が希薄になりより全人生が高まることによるのではないだろうか。

臨床、という表現が1990年代から云われるようになる。中村雄二郎の『臨床の知とは何か』（岩波新書）が発刊されたのが1992年だった。現場や現地、あるいは当事者というものを重視する立場は、本来は臨床的であるはずだった哲学や教育学、社会学へと広がっていった。もともとはベッドサイド、つまりは患者さんのそばによりそう、という医療のありかたをさしていたのである。3.11について考えるときにも当然この「臨床」という方向性が重ねられるだろうが、くりかえすように誰もが当事者になれるわけではない。そこえ考えられるのは、ぼくが「取込み (built in)」と呼んでいるところの工夫である。これは、云ってみれば3.11を自らの思想なり作品なりの内部に取り込んで、そして当事者とは異なったスタンスで3.11を解釈ないし処理しようという態度のことである。内部への取込み方は、ジャンルによってもメディアによってもさまざまであり、それをどのようにアウトプットするかについても考えなければならぬ。だが、とりあえずはこの二十年云われ続けてきた臨床という姿勢に加えて、この取込みという方法を用いることで、3.11を記号やイメージの呪縛から脱却させることはできないだろうか、というのが、ぼくなり「3.11への応答、への応答」であった。これもくりかえしになるが、他者からの問いかけに対する「応答 (response)」を行なう可能性のある場合には、そこに「責任 (responsibility)」が伴うということ忘れてはならないということだ。むろん責任にも程度や重さや価値といった水準がないでもないが、少なくとも「応答」にはそれだけの「覚悟」が要求されているということだ。

---

#### 参加者からのコメント



Ryo Hara 2012年3月30日

a.Laboから大変丁寧な応答をいただいたのもう少し。

a.Laboが掲げるart & societyの「&」とは何か。artとsocietyは、対峙しているのか、並走しているのか、どちらかがもう一方を生み出す種なのか、両者の狭間に別な何かを媒介することで初めて関係を持つものなのか。

もし両者が何らかの関係の上に互いに成り立つものであるならば、「価値観の変化」にフォーカスを当ててみたい。中部電力芸術宣言は、「そもそも人間生存の大前提となった電力供給に我々は常に意識...的であらねばならない」とした上で、「地方文化と電力会社はほぼ1対1の対応関係にあるという事実」を指摘している。この事実を否応なしに知らされたのもまた、3.11であった。

震災当日は、東北の大半の地域が停電した。漆黒に沈んだ当日の夜の仙台は、それは見事な星空に包まれた。あの日見上げた夜空は、東北に住む約440万世帯が同時に経験した異質な世界のワンシーンだったのかもしれない。これもまた、東北電力管内というひとつの地域の共通体験だ。50Hzと60Hzの差異も、震災へのイメージの差異につながるのかもしれない。と考えると、震災を契機として電気を考えるとは、何も原発だけの話ではない。今後の電力各社の進む方向次第では、我々の社会生活は、電力会社の管轄で色分けされたひとつの文化圏として、より強く特徴を持つことになるのかもしれない。

9年ほど前に当時在籍していた研究室で「都市は戦争できない」という危機管理をテーマとする本を出した。この国の仕組みを変えるために憲法の思想を転換するという大きなテーマに挑み、そのひとつとして、既存の9条論を、現代のあらゆる危機に備える危機感理論として再構成するというのがその本の主旨であった。そこで浮き彫りにしたのは、都市は危機に対していかに脆いということ。そこで調べた数字では、東京の電力自給率はわずか7%だった。

平時の社会は、繊細で脆いシステムの上に、精密機械のように動いている。現在の都市は発展すればするほど、大きなシステムによって動かされ、大半が見えない他者への依存によって成り立っている。そして、その基盤となるエネルギーは、電気である。近年、ITは平時の社会システムとして、人々の日常に根深く入り込んできた。これが震災によって止まった。ケータイもインターネットも使えないじゃないか！自分の生活を振り返っても、バッテリー切れの早いスマートフォンからガラケーに戻し、それ以前はケータイどころか何年か振りの公衆電話。通信については、少なくとも15年は巻き戻された。生活を守るための情報をITではなく、足と勘で稼ぐ日々が続いた。

震災2週間後、実家の引っ越しで帰った東京の暗さに驚いた。こと、電力に関しては東京もある一定の立場を持った当事者（東北のそれとはするどく対峙する関係でもあるだろう）だった。すなわち、電気をめぐる問題は、確かに小林先生曰く「すぐれて公共性の高い問題であるがために、ある意味誰もが『平等に』コミットメントできる問題」だった。

それも含めて、この脆い世界に住む私たちは、3.11で何が変わったか。あるいは何を変えるべきか。9年前に出した警句を、十分に活かし切れぬまま震災を迎えてしまった側の人間としても、避けて通れないresponsibilityがある。

そして、何年か東北で仕事をしてみて思ったのは、決して原発がなければ、、、では済まない課題が、あらゆる地域に横たわっていること。震災が顕在化したのは、いままで課題として掲げていながら、着手がおりそかになっていたものが、危機として露呈したこと。

様々な手が差し伸べられて延命された課題もあれば、光がいままで以上にあたらなくなつて危機がより早まった課題もある。だからこそ、MiMoSが早々に掲げたのは、本来の活動を一層励むことだった。お互いが自分の本来の守備範囲に引き寄せて3.11を考えたとき、artの分野とも、この認識は共有できるだろうか。

artを論じ、societyを論じることで生まれてくるであろう何かも、3.11で変わった何かであるかもしれないし、変わらない何かかもしれない。art & societyって何だろう？という問いは、今後も重ねていきたい。

最後に余談だが、知的好奇心も携えながら、応答を続けていくことができるこの場こそ、大学かくあるべしだ。学生時代、授業に出ずに指導教授にメシをたかりながら、結果として個人レッスンを引き出したずぼらな体験や、正規の院生2名、モグリ社会人30名という破天荒な研究室にいた経験が、こういう場にも反応できるベースにもなっているのは面白い。

作品を生み出し、応答も続ける先生方のパワーや、驚異的な速さで本を読みまくる小林先生のスピード感。IAMASの圧倒的なパワーに触れられて、ここ数日の自分の動きにも、何かエネルギーのようなものが宿ってきたように思う。ITインキュベートとartの分野の学問が近接する場が生み出すエネルギーが、社会を動かすインフラになると、大垣は、いよいよ世界の中心として大きな歯車を回し始めるのかもしれない。

---

#### コメントへの応答



Masahiro Miwa 2012年3月31日

今回の問題意識にびたりと呼応した貴重なコメントをありがとうございます。art & societyの「&」とは何か。まさにその関係性をある程度でいいから明確化できないものかとぼくは考えています。なぜなら、それがもはや自明のことではなくなっているからです。おそらくartに代表されるものはきわめて私的な体験に関するものでありsocietyはそれらを可能にしている仕組みだとすると（なのでしょうか？）、artのことをartの問題としてだけ扱うことがまったくできない。さらに言えば、societyのことをsocietyの問題として扱うこともできない。なぜならsocietyはtechnologyに依存しているからです。そしてご指摘のようにそ

のtechnologyはきわめて脆弱な精密機械のようなもので自然災害などに鍛えられた歴史がない。そう考えると「赤信号、みんなで渡ればこわくない」を今、国家規模いや地球規模でぼくらはやっているような気さえしてきます。おそらく、本当にどうしても赤信号を渡らなくてはならないのか？、それが本当に唯一の善いことなのか？を考えることがartの領域なのだろうと思います。これからも応援よろしくお願いします！み

---